

〈研究ノート〉

実話映画への6つの心理学的アプローチ (1)

——「レナードの朝」¹への生物学的アプローチを中心に——

獅々見 照²・獅々見元太郎³・松尾 義和⁴

(受付 2013年5月27日)

Key words: 'Awakening,' a movie based on a true story, 6 approaches in psychology, biological approach, L-DOPA

学部レベルの心理学教育が目指すところは、学生に「心理学的なものの見方 psychological way of thinking」を習得させることにある。しかしながら、心理学の領域は広く、またそれぞれの領域が多様な内容を含んでいるため、学生は心理学を学べば学ぶほど、整理されない知識の山に圧倒されてしまう。そこで、心理学教育の担当者に必要なことは、心理学のおおよその領域について学んだ段階の学生が、心理学に関連した様々な情報（例えば、本論で取り上げた実話映画）に直面した時に、これをいくつかの基本的なアプローチ（あるいは、視座）からとらえ直すことが出来るようになるよう指導することである。これにより、雑然とした心理学関連情報が学生の頭の中で体系的かつ組織的に整理されることになる。また、心理学の諸問題については様々な立場があり得ることも理解され、学生はよりバランスのとれた真偽の判断（あるいは、判断の保留）が出来るようになる。

それでは、心理学のテーマである「人間の心と行動」へのアプローチとしてはどのようなものがあるのだろうか。代表的な心理学の入門書から主なアプローチを見てみることにする。

本論文で準拠することになる、北米でポピュラーな心理学の入門書である Plotnik (1999, p. 5) では、心理学のアプローチは以下の6つにまとめられている。

(1) 生物学的アプローチ biological approach

生物学的アプローチは、遺伝子、ホルモン、神経系がどのように環境と相互作用して学習、パーソナリティ、記憶、動機づけ、感情、対処法などに影響を及ぼすかに

1 媒体：DVD ビデオ 配給：コロムビア映画 発売：(株) ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント

2 現所属：広島修道大学人文学部

3 現所属：Békésy Laboratory of Neurobiology, University of Hawai'i at Manoa

4 現所属：山口県立大学社会福祉学部

焦点を当てる。

(2) 認知的アプローチ cognitive approach

認知的アプローチは、我々が情報をどのように処理し、貯蔵し、使用するか、またこの情報がどのように注意、知覚、学習、記憶、信念、感情などに影響するかを調べる。

(3) 行動論的アプローチ behavioral approach

行動論的アプローチは、環境内の事象が報酬になるか、それとも罰になるかによって、我々はどうのように新しい行動を学ぶのか、あるいはどのように既存の行動を修正するのかを研究する。

(4) 精神力動論的アプローチ psychodynamic approach

精神力動論的アプローチは、無意識の恐怖、欲望、動機づけが、思考、行動、その後の人生におけるパーソナリティ特性の発達や心理的問題などに及ぼす影響を強調する。

(5) ヒューマニスティックアプローチ humanistic approach

ヒューマニスティックアプローチは、個人が自分の将来の方向に対する可能性、個人の成長の可能性、本来的価値、自己実現の可能性を十分に有していることを強調する。

(6) 交差文化的アプローチ cross-cultural approach

交差文化的アプローチは、文化的、民族的類似や差異がグループメンバーの心理的、社会的機能に及ぼす影響を調べる。

いっぽう、北米の大学で最もよく用いられている心理学の入門書のひとつである Atkinson, et al. (2000) では、心理学の視座として以下の 5 つが挙げられている。

- (1) 生物学的視座
- (2) 行動論的視座
- (3) 認知的視座
- (4) 精神分析的視座 psychoanalytic perspective
- (5) 現象学的視座 phenomenological perspective

両者のアプローチ（視座）を比較すると、おおむね一致していることがわかる。実際、Atkinson, et al. (2000) の (5) 現象学的視座は、Plotnik (2000) の (5) ヒューマニスティックアプローチと同じ内容を表している。ただし、Atkinson らの分類では社会・文化的視座が

6番目のカテゴリーとして挙げられていない。これは、Atkinsonらの本の元になっているHilgard (1953)が社会領域を「(基礎)心理学の応用」として位置づけ、Atkinsonらがこの立場を2000年の改訂版の時点でも継承したことによると考えられる。

また、Zimbardo, Weber, & Johnson (2003)は、心理学の視座として、生物学的見解 view, 進化的 evolutionary 見解, 認知的見解, 精神力動論的見解, ヒューマニスティックな humanistic 見解, 行動論的見解, 社会文化的見解の7つを挙げている。進化的見解は、最近の心理学における進化心理学 evolutionary psychology の台頭を反映している。

さらに、Santrock (2003)は、行動論的アプローチ, 精神力動論的アプローチ, 認知的アプローチ, 行動神経科学的 behavioral neuroscience アプローチ, 進化心理学的アプローチ, 社会文化的アプローチの6つを挙げている。この本では、旧来の生物学的アプローチは心理学の最先端領域である行動神経科学を強調して、行動神経科学的アプローチに置き換えられている。

本論文では、これらのアプローチ法の最大公約数を表しているPlotnik (1999)の6つのアプローチを採用する。ただし、彼の交差文化的アプローチの代わりに、これと同一内容であるが、より一般的な術語である社会文化的アプローチ socio-cultural approach を使用することにする。

実話にもとづく映画

心理学の入門コースを終えた学生の心理学教育を実りあるものにする方法のひとつとして、心理学に関連した映画を活用することが考えられる。無味乾燥の心理学的知識の学習と違い、心理学に関連した映画を鑑賞することで、心理学的現象や問題を直接体験できる機会が与えられる。心理学的現象や問題は現実のものとなり、学生の心に深く刻まれ、心理学的なもの見方の習得が助長されると期待できる。また、映画という興味を引く教材は、学生の学習への動機づけを高い状態に保つ効果を持っていると考えられる。

映画とはいっても、アニメ、SFを始めとして様々な種類のものがあるが、本論文では「実話にもとづいた based on a true story 映画」をとりあげて、その心理学的分析を試みる。精神分析の領域では、人間の精神の闇を事例以上に表現したものとしてフィクション映画が積極的に取り上げられて心理分析が行われているが(例えば、佐野, 2003)、心理学が実証科学の立場を堅持する限りは、分析対象は実話映画という実際に起きた出来事であるほうが望ましいのは言うまでもない。

実話映画は、前述した6つのアプローチから見ていくことが出来るが、映画によっては主となるアプローチは異なってくる。もちろん、実話映画の多くに共通して映画を通して

描かれているのは主人公のヒューマニズムであるから、映画を主にヒューマニスティックアプローチから分析することが他のアプローチに優先して考えられるが、それでも映画によっては、これ以外のアプローチがヒューマニスティックアプローチ同様に重要なアプローチを提供してくれる場合がある。

参考までに、それぞれのアプローチに適した実話映画を列挙してみると、以下のような組み合わせが考えられる。

生物学的アプローチ

アイリス (2001)

認知的アプローチ

誘導尋問 (1995)

行動論的アプローチ

奇跡の人 (1962)

精神力動論的アプローチ

17歳のカルテ (1999)

ヒューマニスティックアプローチ

パッチアダムス (1998)

社会文化的アプローチ

落ちこぼれの天使たち (1987)

実話映画を教材として取り上げることのメリットは、映画とは別に関連する事実や実在する資料を調べることが出来る点にもある。実話映画とは言っても観客を意識して脚色されるのが常である。関連する事実を調べることによって、真実に近い形で映画のストーリーを分析することが可能となる。

そこで、本論文では主に生物学的アプローチから実話映画を分析する例として、1990年に公開された「レナードの朝 Awakenings」を取り上げる。

「レナードの朝」

この映画の基本的情報は次の通りである（オリヴァー・サックス原作 スティーヴン・ザイリアン脚本 ペニー・マーシャル監督、1990）。

監督：ペニー・マーシャル

脚本：スティーヴン・ザイリアン

原作：オリヴァー・サククス

出演：レナード・ロウ（ロバート・デ・ニーロ）

マルコム・セイヤー医師（ロビン・ウィリアムズ）

看護師エレノア・コステロ（ジュリー・カブナー）

レナードの母ロウ夫人（ルース・ネルソン）

レナードの恋人ポーラ（ベネローブ・アン・ミラー）

配給：コロンビア映画

DVD ビデオ販売：ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント

あらすじ

主人公のセイヤー医師は、基礎研究の継続をあきらめて、ブロンクスにある慢性精神科病院に就職する。臨床経験の乏しいセイヤーは患者を注意深く観察することで、それまで非定型という診断で片付けられていた石のように硬直した患者のグループのあることに気づき、患者の症状が流行病の後遺症である嗜眠性脳炎によることを発見する。彼は、魂の抜け殻のような患者の中にこころが生きている、と主張するが、同僚の医師たちは冷笑する。唯一看護師のエレノアだけはセイヤーの見解に賛同し、彼に協力を惜しまない。患者グループの症状がパーキンソン病のそれに似ていることを知ったセイヤーは、当時パーキンソン病の治療薬として開発されたばかりのL-DOPAをレナードに投与する。その結果、レナードに奇跡的に「めざめ」が起きる。この結果を受けてセイヤーは、嗜眠性脳炎の患者グループにL-DOPAを投与して、次々に患者を目覚めさせることに成功する。正常状態に戻ったレナードは、たまたま家族に面会に来たポーラと親密になり、それまで子どもを生き甲斐にして献身的にレナードを看護して来た母親を無視するようになり、母親は落胆する。L-DOPAの投与により、患者たちは正常な状態にもどったが、やがてレナードにL-DOPAが効かなくなり、また薬によってチック、妄想、攻撃性などの副作用も生じ始める。レナードは、他の患者にも来るべき事態に対して準備するようメッセージを残して、以前の状態に戻ってしまう。映画は、女性に対して内気なセイヤー医師が帰宅するエレノアを、窓を開けて呼び止め、散歩に誘う場面で終わる。

1. 「レナードの朝」への生物学的アプローチ

それでは、「レナードの朝」を生物学的アプローチから分析してみよう。まず、セイヤー医師が遭遇した石のように硬直した患者たちの病気である嗜眠性脳炎とはどのような病気なのだろうか？

嗜眠性脳炎とは？

百科事典マイペディアによると、嗜眠性脳炎とは嗜眠（意識障害のうち最も強い昏睡に次ぐ状態）を主症状とする脳炎で、エコノモ型脳炎とも呼ばれる。第 1 次大戦後ウィーンに流行し、日本でも一時局地的流行をきたしたが、その後はみられなくなったという（ウェブサイトの嗜眠性脳炎を参照）。嗜眠性脳炎はパーキンソン病様の症状を呈する。

パーキンソン病とは？

パーキンソン病とは、中脳の黒質のドーパミンを産出する細胞（ドーパミンニューロン）が死滅するため、黒質から線条体にドーパミンが送られなくなって、その結果、手足のふるえ（振戦）、筋の固さ（固縮）、動作の遅さ（無動）や転びやすさ（姿勢反射障害）などの障害が生じる病と考えられている（ウェブサイトのパーキンソン病参照）。レナードの朝の患者たちの「ミイラ化した」状態の原因のひとつには、脳内のドーパミンの欠乏が考えられる。セイヤー医師は、患者たちにドーパミンの前駆物質である L-DOPA を投与することによって彼らを奇跡的に目覚めさせることが出来たのである。

パーキンソン病の治療には、薬物療法、外科的手術、移植や近い将来に行われることが期待されている遺伝子治療などがあるが（三浦，2001），このうち、薬物療法では脳内のドーパミンを増やすために、通常ドーパミンの代わりに L-DOPA が投与される。というのは、ドーパミンを服用ないし静注しても、血液-脳関門のために血管から脳内へ通過できないからである。そこで、ドーパミンの前駆物質である L-DOPA を服用または静注し、血液-脳関門を通過させる。脳内に運ばれた L-DOPA は、酵素によってドーパミンに合成され、ドーパミンは神経伝達物質としての働きを取り戻す。ちなみに、神経伝達物質のドーパミン、ノルエピネフリン（ノルアドレナリン）、エピネフリン（アドレナリン）からなるカテコラミンは、まず、フェニルアラニンからチロシンが、チロシンから L-DOPA が、L-DOPA からドーパミンが、ドーパミンからノルエピネフリン（ノルアドレナリン）が、最後にノルエピネフリンからエピネフリン（アドレナリン）が合成される。

ドーパミンは脳内でどのような働きをしているのだろうか？

黒質のドーパミンニューロンが死滅しているパーキンソン病の患者の例から、黒質で合成されたドーパミンは線条体に送られて行動一般の動機づけに深く関与していると考えられている（青崎，2001）。また、「レナードの朝」の嗜眠性脳炎の患者や脳外傷による植物状態の患者の例から、ドーパミンは意識レベルを高める（あるいは、意識を取り戻す）働きをしていると考えられる（Fridman, et al., 2009; Fridman, et al., 2010）。

パーキンソン病に見られるドーパミンの不足とは反対に、急性期の統合失調症や覚せい剤

の使用時に特徴的な幻覚や妄想、不眠、無食欲、性欲亢進などのほか、トールレット症のチック症状は、前頭葉におけるドーパミンの過剰が関係していると考えられている（青崎，2001）。

映画ではL-DOPAの投与を続けることによって、レナードにこれらの症状（副作用）が生じている（ただし、映画では性的亢進の場面は抑えられた表現になっている）。

やがて、L-DOPAの望ましい効果も次第に減弱して、レナードは、終に元の状態に戻ってしまう。

L-DOPAの投与によって「ミイラ化した」嗜眠性脳炎患者が一時的ではあっても（意識と行動において）正常な状態に戻った。そして、同じ薬がやがてさまざまな副作用をもたらし、薬の効果もなくなった。以上が、この映画に関する生物学的アプローチのポイントであると言える。

2. 「レナードの朝」への認知的アプローチ

認知主義では、「行動はこころの窓である」と考える。行動主義では、こころはブラックボックスのまま、むしろ刺激とそれに対する反応（行動）に意味を見いだそうとするが、認知主義では、行動はこころを知るための手がかりに過ぎない、あくまでも問題にするのはこころの働きである（Amsel, 1989を参照のこと）。レナードの脳波を測定した場面では、自分の名前への呼びかけに対してレナードの脳波が変化（反応）を示した。この場面は認知心理学から、ミイラ化したレナードの身体に「自己の意識」が保たれていることを証明していると理解される。

ルーシーはある時、窓際に行こうとするが、部屋の途中で動けなくなってしまう。セイヤー医師は、部屋の床の途中から市松模様のパターンがなくなっていることに気づく。窓際まで市松模様を延ばしてやると、ルーシーは窓際まで歩いて行って窓の外の遊ぶ子どもたちを眺めたのである。これは、彼女にとって市松模様のない床は、市松模様と違って不安定な、その上には立てない表面、そこに行ったら落ちてしまう視覚的断崖 visual cliffに見えたからであろう（Gibson, and Walk, 1960）。

3. 「レナードの朝」への行動論的アプローチ

行動論的アプローチは、レナードにフラッシュ光を提示して脳波を測定する場面に適用できる。行動論的アプローチが前提にしているのは、もしもフラッシュ光の提示に対して、これと同期した脳波が観察されれば、脳は光刺激を処理しているといえる、というものである。同僚の医者たちは、この場面で脳波に反応が見られないことから、患者の脳は機能していない、と結論した。これは、行動論的アプローチを表している。しかし後述するように、自分の名前を呼びかけられるとレナードの脳波は変化を示した。それでも同僚は、脳波の変化は

単なる刺激に対する反射に過ぎないという行動論的見解を持ち続けた（後に、レナードの意識が完全に戻ることによって、この見解は否定されることになる）。

セイヤー医師は、ルーシーがずり落ちたメガネを瞬時に掴まえたことから、嗜眠性脳炎患者の識別に「反射」が利用できることに気づく。防御反射（患者に向かって投げられたボールを素早く受け止める反応）の有無によってセイヤー医師は、それまで「非定型」としか分類されていなかった嗜眠性脳炎患者を同定することが出来た。彼が診断に利用したのは行動論的アプローチの刺激－反応の枠組みである。

4. 「レナードの朝」への精神力動論的アプローチ

レナードに「めざめ」の起きた1969年ごろの北米社会においては、精神分析の影響力はかなり少なくなっている。レナードが申請した退院許可について審議する場面で、精神分析医のノラはレナードに向かって、「あなたは私たちに対して敵意を持っていることに気づいている？」と問う。これに対してレナードは、「無意識のものを気づくはずはない。」と彼女に反論する（スタッフは失笑する）。精神分析の考え方がもはや人々に受け入れられなくなったことを反映した場面である。

レナードの看護に明け暮れる母親のロウ夫人だが、めざめた後に恋人が出来て、母親から独立しようするレナードに対して我慢できない。レナードが病弱で自分に依存し続けて欲しいとまで思っている。この母親は、子供を包み込み、育む一方で子供をむさぼり飲み込んでしまうユングの太母（グレートマザー great mother）のイメージそのものである（千原，2001）。

フロイトのリビドーの発達段階は口唇期、肛門期、男根期、潜在期、性器期からなるが、ある段階での欲求不満や過度の快感により、リビドーの固着が生じる。固着の生じた段階や固着の強さに応じて特異的なパーソナリティが生じる、と考えられている（岸本，2003）。フロイトの精神分析（幼児性欲論）からは、セイヤー医師のメガネやシダ植物の収集癖は肛門期に排泄物を体内に留めることによる性的快感の過多を経験することによってリビドーの固着が生じたためであると考えられる。

セイヤー医師の女性に対する内気な態度は、フロイトによれば幼児期の女性に関するトラウマ経験の結果である可能性がある。原作者のオリヴァー・サックスは、両親とも外科医の家に生まれている（サックス，2003）。14歳の時に母親は同僚の教授に頼んで、14歳の少女の死体の解剖実習をサックスに受けさせている（解剖室に入ったとたん、彼は気絶しそうになって、吐き気を催している）。この体験の影響で、サックスが女性に対して病的な内気 shyness を示し、独身を続けていることは容易に想像できる。もちろん彼の女性恐怖症は、たった1回の少女の解剖というトラウマ体験によって女性に対して条件づけられたものであると、行

動論的アプローチから説明することも可能である。

5. 「レナードの朝」へのヒューマニスティックアプローチ

まず、セイヤー医師の患者に対する接し方には、人間的なものが感じられる。患者が何を訴えているかを第1に考えて患者に寄り添う彼の姿勢は、人間性心理学者の代表であるロジャースの来談者中心療法に通じる (Rogers, 1946)。

またセイヤー医師が、ミイラ化したレナードに完全な人格が宿っていることを確信したのは、「レナード」という呼びかけにレナードの脳波に変化が見られたからである。この見解は、脳波の変化は反射に過ぎないと考える (行動論の立場をとる) 同僚のそれと対立する。

さらに、レナードの不自由な身体に高度の知性が保たれていることを、レナードは自分の今の状況を文字盤で「ヒョウ」と綴ることでセイヤー医師に伝える。セイヤー医師は、図書館で文献検索をした結果、その綴りがリルケのオリの中のヒョウを題材にした詩から来ていることを突き止める。

マズローは、欲求の階層理論を提唱している (Maslow, 1943)。人間の動機づけは階層になっており、下から「生理的欲求」、「安全の欲求」、「愛の欲求」、「自尊の欲求」、「自己実現の欲求」がピラミッド型に重なっている。人間は本質的に、下位の欲求が十分に満たされると、その上の欲求を満たそうとする。セイヤー医師は、自らの人間的な立場に基づいて患者に接し、治療を試みた。ここには自己実現 (患者と人間的に接し、患者の治療のためにはあらゆる可能性を探ろうとすること) への飽くなき欲求と努力が認められる。

それぞれの患者は、病と人格の相互作用により独自の世界を表しているという作者オリバー・サックス (1993) の人間観は、William James (1895) の「多元的宇宙 multiverse」への共感を意味している。

6. 「レナードの朝」への社会・文化的アプローチ

「レナードの朝」の最初の場面、セイヤー医師が慢性精神病院を訪れた時、看護師から院内の仕事はガーデニング、花に水と栄養を与えるだけだ、と教えられる。この場面から、当時の精神病院では回復の見込みのない患者に対する非人間的扱いの日常化していたことが推測できる。

また、慢性精神病院では、めざめた後にレナードが退院を申請しても、スタッフはこれを却下する。後にイタリアに始まった「精神病棟からの解放」という運動や精神は、60年代の後半の時代にあっては医療関係者に共有されることはなく、セイヤー医師も患者の人権に配慮しない病院の方針に従わざるを得なかった。ちなみに、イタリアでは1978年に法令180号により精神病院の廃止が決まり、地域で精神障害者を受け入れる体制が整えられている (ウエ

ブサイトのバザリア法参照)。

レナードに L-DOPA を投与するにあたって、セイヤー医師は、ロウ夫人から同意書を取っている。60年代後半に、すでに同意書を患者ないし親族から取るという慣習があったことは、アメリカの医療制度を知る上で役に立つ。

「レナードの朝」のその他の見方

実際のレナード

レナード・L には、15歳の時に右手がこわばるなどの脳炎後遺症の最初の兆候が現れている (サククス, 1993)。不自由が体全体に広がっていったにもかかわらず、彼はハーバード大学に進んだが、27歳の時、学位論文提出の直前に、体の不自由から学業を断念している。その後、3年間自宅で過した後、30歳の時、完全に石のように動けなくなって、マウント・カーメル病院に入院している。病院では、病院図書館の責任者になっている。サククス医師との会話は主に文字盤によっており、電報文のようなものにならざるを得なかった。しかし、前述したように、今の気持ちを訊かれると、リルケの詩の「ヒョウ」のようだ、と答えたのである。この映画を見た者は誰でも、脳炎後遺症患者には「ほとんど意識がない」ように思ってしまうだろう。石のように凍りついて、通常の会話の難しいことが、映画では意識がない状態のように誇張されている点には注意が必要である。

L-DOPA の投与は1969年の3月初旬に始まり、量を次第に増やして1日5グラムまで上げられた。2週間何の変化も見られなかった後に、突然「めざめ」が起きた。3月末にはレナードは自由に歩けるようになった。めざめてからの2週間、彼は現実世界を堪能した。4月には、精神や動きの全てが「過剰」になって、バランスが取れなくなった。不安と不満に襲われ、権力欲と所有欲に結びついた色情狂と化した。同時に、切迫行動、繰り返し、強迫行動、保続が顕著となり、5月後半には切迫行動と保続のために読書が困難になった。チックが現れ、次第に頻繁になっていった。6月になってレナードは、人格の統一を維持し、カタルシスを求めて自伝を書くことに没頭した。6月の終わりから7月にかけて幻覚も生じるようになった。運動機能亢進とアキネジアの交替が現れ、7月末には、世界の終末を感じたレナードは自殺を企図している。L-DOPA の投薬は中止され、レナードは元の状態に戻ってしまう。9月に投与を再開したが、良い結果は得られなかった。その後アマンタジンも試みられたが、ある程度の効果があったものの、次第にその効果も薄れていった。1972年の3月、11度目の投与が最後となった。

このように、L-DOPA の劇的な効果に続いて、投薬のさまざまな「副作用」が起き、やがて L-DOPA の望ましい効果は見られなくなった。L-DOPA の他にアマンタジンが試みられた

ことは、「映画」にはない事実である。

ドーパミンと意識についての補足

最近、ドーパミンと意識についての興味深い研究が報告された (Fridman, et al., 2009; Fridman, et al., 2010)。パーキンソン病の治療薬であるアポモルフィン apomorphine を植物状態の脳損傷患者の脳に直接投与したところ、多くの患者の意識が戻った。投薬が中止されても元の状態に戻ることはなかった。パーキンソン病の治療薬である L-DOPA はドーパミンの前駆物質に過ぎないため、直接ドーパミン受容器に働くものではない。また、アマンタジン はドーパミンの生成を促進するが、ドーパミンニューロンが損傷している場合にはその効果は限定的である。Fridman らは、アポモルフィンが直接ドーパミンニューロンの結合の修復を行って、患者の意識を回復させたのではないかと考えた (Fridman, et al., 2009; Fridman, et al., 2010)。ドーパミンニューロンが損傷していると考えられるレナードのような脳炎後遺症患者の脳にアポモルフィンを直接投与した場合、果たしてめざましい意識の回復 (後戻りしない) が見られるのか? 今後の研究に期待したい。

「窓」

「レナードの朝」の映画では、重要なコンテキスト・マーカーとして「窓 window」が使用されている。セイヤー医師の部屋の窓は、上下のスライド式になっており、勤め始めた時には開閉に苦勞するが、慣れると検査用ハンマーを使ってスムーズに開けることが出来るようになる。そして、最後の場面では、帰宅する看護師コストロを呼び止めるために窓を開ける際、慌てたために頭を窓枠にぶつけてしまう。また、成人のルーシーが窓の外に見たかったものは、屋外で遊んでいる子どもたちであった。セイヤー医師が理事会でレナードらに起きたことを報告する中に「薬の窓 chemical windows は閉ざされましたが、別のめざめ (魂の)めざめがあったのです (括弧内は筆者による)」という表現が使われている。

以上をまとめると、こころと行動の実証科学である心理学には、一般に6つのアプローチ (生物学的アプローチ、認知的アプローチ、行動論的アプローチ、精神力動論的アプローチ、ヒューマニスティックアプローチと社会文化的アプローチ) がある。学生は実話映画を6つのアプローチから分析することで心理学をより深く理解できるようになるだけでなく、実生活の心理学的現象や問題にこれらのアプローチを適用して考えることが出来るようになるだろう。この例として、本論文では実話映画、「レナードの朝」の心理学的分析を、主に生物学的アプローチから試みた。生物学的アプローチによって「レナードの朝」を分析すると、この映画は、L-DOPA の投与によって「ミイラ化した」嗜眠性脳炎患者が一時的に正常な意識状態を取り戻したが、やがて、L-DOPA は深刻な副作用をもたらし、さらに、薬の効果も

なくなって、患者は元の状態に戻ってしまったという、脳内におけるドーパミンの作用の物語として理解できた。また、ルーシーの立ちすくみ、反射、レナードの収集癖、慢性精神病院などについて残りの5つのアプローチから検討された。

引用文献

- Amsel, A. (1989). *Behaviorism, neobehaviorism, and cognitivism in learning theory: Historical and contemporary perspectives*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- 青崎利彦 (2001), 2 脳内物質ドーパミンのはたらき 第67回老年学公開講座 (http://www.tmig.or.jp/J_TMIG/kouenkai/koza/67koza_2.html)
- Atkinson, R. L., Atkinson, R. C., Smith, E. E., Bem, D. J., and Nolen-Hoeksema, S. (2000). *Hilgard's introduction to psychology*. 13th ed. Orland, FL: Harcourt Brace College Publishers.
- Fridman, E. A., Calvar, J., Bonetto, M., Gamzu, E. R., Krimchansky, B. Z., Meli, F., Leiguarda, R. C., and Zafonte, R. (2009). Fast awakening from minimally conscious state with apomorphine. *Brain Injury*, **23**, 172–177.
- Fridman, E. A., Krimchansky, B. Z., Bonetto, M., Galperin, T., Gamzu, E. R., Leiguarda, R. C., and Zafonte, R. (2010). Continuous subcutaneous apomorphine for severe disorders of consciousness after traumatic brain injury. *Brain Injury*, **24**, 636–641.
- Gibson, E. J., and Walk, R. D. (1960). The “visual cliff.” *Scientific American*, **202**, 67–71.
- Hilgard, E. R. (1953). *Introduction to psychology*. New York: Harcourt, Brace and Co.
- James, W. (1895). Is life worth living? *International Journal of Ethics*, **6**, 1–24.
- 岸本陽一 (2003), 11 パーソナリティ 今田 寛・宮田 洋・賀集 寛共編 心理学の基礎 三訂版 東京: 培風館 pp. 211–242.
- Maslow, A. H. (1943). A theory of human motivation. *Psychological Review*, **50**, 370–396.
- 三浦正巳 (2001), 1 パーキンソン病のしくみ 第67回老年学公開講座 (http://www.tmig.or.jp/J_TMIG/kouenkai/koza/67koza_1.html)
- オリバー・サックス著 石館康平・石館宇夫訳 (1993), レナードの朝 東京: 晶文社
- オリヴァー・サックス著 齊藤隆典訳 (2003), タングステンおじさん 東京: 早川書房
- オリヴァー・サックス原作 スティーヴン・ザイリアン脚本 ベニー・マーシャル監督 (1990), 「レナードの朝」DVD 版 配給: コロンビア映画配給 発売: ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント
- Plotnik, R. (1999). *Introduction to psychology*. 5th ed. Belmont, CA: Wadsworth Publishing Co.
- Rogers, C. R. (1946). Significant aspects of client-centered therapy. *American Psychologist*, **1**, 415–422.
- 佐野直哉 (企画・司会) (2003), 教育研修セミナー S7: 映画で精神分析を学ぶ 日本精神分析学会第49回大会
- Santrock, J. W. (2003). *Psychology*. 7th ed. Boston, MA: McGraw-Hill Co.
- 千原雅代 (2001), 2 元型 一個人を動かす個人を超えたもの— 山中康裕 (編) ユング 東京: 講談社
- Zimbardo, P. G., Weber, A. L., and Johnson, R. L. (2003). *Psychology: Core concepts*. 4th ed. Boston, MA: Allyn and Bacon.

関連ウェブサイト

- オリヴァー・サックス ホームページ (www.oliversacks.com)
- コトバンク: 嗜眠性脳炎 (<http://kotobank.jp/word/嗜眠性脳炎>)
- 東京都神経科学総合研究所: パーキンソン病 (<http://tmin.igakuken.or.jp/medical/01/parkinson1.html>)
- バザリア法—Wikipedia (ja.wikipedia.org/wiki/バザリア法)

Summary

Six approaches to the psychology of a movie based on a true story I: Highlighting the biological approach to the psychology of the movie, 'Awakening (1990)'

Akira Shishimi, Gentaro Shishimi and Yosikazu Matuo

In general, there are six approaches (biological, cognitive, behavioral, psychodynamic, humanistic, and socio-cultural approach) in psychology, which is defined as the science of mind and behavior. A movie based on a true story might be quite an effective learning material in psychology courses. That is, seeing a movie based on a true story is believed to help students to understand six approaches in psychology and apply them to the psychological phenomena and problems in real life. In this paper, six approaches, of which biological approach was emphasized, were applied to the psychology of the movie based on a true story, 'Awakening (1990).' From the biological point of view, the movie could be seen as the story about the action of a neurotransmitter, dopamine, in the brain of Economo's disease patients and resulting temporarily recovered consciousness among them. Five other approaches were applied to the psychology of various scenes in the movie, too.